The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	多文化社会ドイツにおける移民統合ー移民の母親の語りと支援現場の実践からー
Author(s)	大津, 真実
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92232
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　大　津　真　実　）	
論文題名	多文化社会ドイツにおける移民統合 ―移民の母親の語りと支援現場の実践から―

論文内容の要旨

本論文は、「移民国」となったドイツにおいて、移民統合政策のキーパーソンとして高い関心が寄せられている移民の母親と、移民の母親の統合を促す支援現場に着目することにより、移民統合のあり方を考察した研究である。具体的には、ベルリン市で実施される統合措置（「地域の母親（Stadtteilmütter）」）の参加者である移民の母親と、統合措置の実施機関である社会福祉団体を調査対象とした。統合のあり方を検討するにあたっては、移民の適応よりも受け入れ社会の制度・構造的変化を重視する異文化開放をめぐる議論を踏まえ、移民と受け入れ社会の双方向の変化を促すプロセスの解明を目指した。

本論文は２部構成をとる。第１部は先行研究の検討であり、第１章、第２章、第３章からなる。第１章では、家族事業として移住を捉える動きや、移民の母親に焦点を当てた昨今の政策動向に言及し、先行研究を整理して本研究の課題と方法論を提示した。移民の母親の統合に関する先行研究は、受け入れ社会の諸基準（主に言語習得、就労、社会関係、帰属意識）に基づき、統合の到達度を測る傾向にある。これらの研究は、統合を移民の一方向的な適応として捉えていることに課題があることを指摘した。その上で、こうした移民を他者化・異質化する従来の視点を克服するため、トランスナショナリズム研究を参照するとともに、質的調査法を用いて統合をめぐる移民自身の主観的な意味づけや、移民と受け入れ社会に働きかけを行う支援現場の実践を明らかにすることを提起した。

第２章では、統合概念をめぐる議論の変遷を整理し、近年は統合という概念を移民から切り離し、全社会的な課題として理解しようとする動きが高まっていることを確認した。続いて、統合の理論的枠組みを検討するにあたり、代表的な理論モデルを紹介し、移民の主観的な視点の重要性を指摘した。さらに、統合の文脈からトランスナショナリズム研究を整理した。

第３章では、ドイツの移民国としての歩みに焦点を当て、戦後から現在に至るまでの移民政策の変遷を概観した。前半ではドイツへの移民の流れを４つの時期から捉え、対象となる移民集団により法的地位や統合政策が異なることを確認した。後半では移民統合支援において中心的な役割を担ってきた社会福祉分野に着目し、1980年代後半以降の支援の転換について示した。とりわけ移民統合支援の現場における異文化開放をめぐる動きを整理した。

第２部は事例研究である。第４章では、研究方法論と調査概要を示し、分析方法として採用したライフストーリーとM-GTAについて説明した。また、調査地であるベルリン市およびノイケルン区の移民状況を概観し、本研究が事例として扱う統合措置について、その成立過程や仕組みを詳細に記述した。

第５章では、移民の母親の語りから統合のあり方を考察した。Schramkowski（2007）の統合モデルを基に分析し、中でも統合をめぐる認識（統合認識）と帰属意識の分析から、大きく３つの知見が得られた。１つ目は、統合認識・帰属意識の形成に、ドイツ語習得及びドイツ人との交流、ドイツ社会で受ける差別、子どもの存在、出身国という４つの要素が重要な役割を果たしていることである。２つ目は、帰属の場所ではなく、帰属の変遷に着目することの重要性である。受け入れ社会への帰属意識については、滞在期間との関連性が指摘されているが、必ずしも段階的に形成されるものではない。帰属意識の形成／変化のプロセスには、受け入れ社会がどのように移民に開かれてきた（／移民を排除してきた）か、ということが映し出される。したがって、移民自身の視点から移民統合政策の発展を捉え直すという意味においても、帰属の変遷に着目することの意義を指摘した。３つ目は、トランスナショナルな視点を踏まえて統合を理解することの重要性である。トランスナショナルな帰属意識の形成については、ドイツで生まれた第２世代以降を対象とする研究の中で指摘されてきたが、第１世代を対象とする場合であっても、曖昧性や多義性を含む統合理解が不可欠であることを指摘した。

第６章では、統合支援現場の職員の移民および連携組織への働きかけから、いかにして移民と受け入れ社会の双方向の変化が生まれるのかを考察した。主要な分析結果は次の３点である。まず、移民に対する働きかけについて、移民個々人と向き合いながらチームとして育てることで、統合が促されることを指摘した。チームへの帰属意識は

次第に地域、社会へと拡大していく。一方で、帰属意識の形成には受け入れ社会からの承認が不可欠となる。支援現場の実践から、敷居の低いサービスの提供や雇用契約が承認を表す手段として有効であることを示した。次に、受け入れ社会の認識を開かれたものにするには、移民とマジョリティ社会の対等性を意識した取り組みが重要な役割を果たすことを指摘した。最後に、これらの取り組みを通じて移民が受け入れ社会に積極的に参加し、受け入れ社会側も移民に対して開かれた視点を持つことで、移民統合は移民の問題ではなく、社会全体の課題として理解されるようになることを述べた。こうした転換は、移民との直接的な交流や、仕事上のパートナーとしての経験によって、認識・構造レベルで起こる。第６章では、移民に対する具体的な取り組みや、移民統合を促す職員の考え方、さらには、モデルプロジェクトが制度化されるまでの変遷をも描くことで、他の移民統合支援においても汎用可能な実践的な知見を生み出すことを試みた。

第７章では本研究のまとめを行い、本研究から得られた示唆を整理し、今後の課題を示した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 大津　真実 ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	進藤　修一
	副 査	教授	岡本　真理
	副 査	教授	山根　　聡
	副 査	教授	村上　忠良
	副 査	教授	村上　正行

論文審査の結果の要旨

本論文は、1955年以後の外国人労働者導入を契機として増加し、いまや数多くの外国の出自をもつ市民を抱えるドイツ社会におけるそれらの人々の社会への「統合」政策に焦点を当てた労作である。そして、ドイツにおける多くの統合政策のなかでも、本論文は子どもの教育参加における親の役割に注目し、また、移民の母親に対する就労支援という観点から、特に移民の母親に焦点をあて、ベルリン市で実施されている「地域の母親プロジェクト」をフィールドに、移民統合のあり方について詳細に考察している。

本論文はまず、第一部においてドイツにおける移民統合に関する学術的議論を丹念に整理している。審査申請者は、これまで移民の社会統合に関する理論で規範的とされてきたヘルムート・エッサーの同化理論やその発展形であるフリードリヒ・ヘックマンの理論を詳細に検討し、移民受け入れ側の視点が強く反映されているこれらの理論がもつ問題点を照射する。この批判的検討を基に、移民側の主観性に重点を置いた統合モデルを提唱するバーバラ・シュラムコフスキの理論に着目する。審査申請者はこのシュラムコフスキの議論から、移民側への一方的な同化の働きかけではなく、受け入れ社会の意識・態度の変化、移民集団と受け入れ社会側双方向への働きかけが統合にとって不可欠であると認識し、統合を移民のみならず全社会的な課題ととらえる視点を明確に打ち出し、議論を展開している。また、これら社会学の先行研究以外にも、ピエール・ブルデュの流れを汲むヨーゼフ・ヘルトらの議論にも触れ、理論的検証を多角的に行うことに余念がない。このような学術的理論の整理、検討は、日本におけるドイツ移民研究においてまだまだ不十分な点であり、この部分だけでも、本論文の学術的は高いと判断できる。これらの理論検証をもとに、本論文第二部のフィールドワークに基づく論証に入るが、この二つを接続するために、第一部第3章において、現代ドイツに移民社会が出現するに至った歴史的経緯を丹念に追っている。

第二部の事例研究では、ベルリン市ノイケルン区において筆者が実施したフィールドワークに基づいて検証が進められる。調査対象は、ドイツの移民「統合」プロジェクトである「地域の母親」に参加した移民の女性や当該事業に従事するスタッフであり、彼女たちへのインタビューを通じて、本論文はドイツにおける移民の「統合」についての多層的な考え方を明らかにしようとする。この調査対象者が参加したプロジェクトはオランダの先行事例を参考に2000年にベルリン市で立案され、公的に支援されさらなる発展を見せながら現在も継続しているものである。そして、このプロジェクトには二つの狙いがある。ひとつは失業中の移民女性に講座や研修を提供することにより、これらの女性を労働市場へ統合することを促進する狙いである。そして、このプロジェクトにより育成された「地域の母親」が、移民家庭に教育上必要な情報を提供し、子どもたちの教育機会を改善することを第二の目的としている。このプロジェクトはこれまで先行研究でも注目されてはきたが、本論文のように包括的に検討を加えたものは少ない。また、単にドイツの移民の事例研究に留まらず、グローバル化が進む現代社会の移民の増加という現象への対処も想定して論を進めている点も大いに評価できよう。

フィールドワークでは２種類のインタビューが実施されている。まず筆者は移民の母親のドイツ社会への統合プロセスを明らかにすることを目的として移民の母親へのライフストーリーのインタビューを実施し、この分析を試みる。本論文はこのライフストーリーから、移民の母親の統合認識及び帰属意識に影響を与える要素などが整理され、インタビューから非常に重要なデータを引き出している点が非常に興味深いといえる。次に、支援現場の職員に対して半構造的インタビューを実施し、m-GTAによって分析した結果として、最終的に30の概念、 10のサブカテゴリー、 6のカテゴリーを生成し、ストーリーラインと結果図を作成している。このストーリーラインと結果図

によって、プロジェクトのプロセスが可視化され、このプロジェクトが移民の母親と受け入れ社会の双方へ影響を与え、かつ双方向への変化を引き起こしていることを明らかにしている。この研究成果は、移民の統合支援に広く活用できるとともに、他にも適応できる可能性が期待できる。

第二部の研究手法であるインタビューの記述と分析においては、インタビュー内容をいかに客観的に分析するかという観点から質的調査法についての批判的な検討を行ったうえで調査を行い、移民女性や当事者の声を丁寧に紹介している。また、このドイツの移民「統合」プロジェクトに参加した移民女性や当該事業に従事するスタッフへのインタビューは、移民研究全般に対しても大変貴重な資料となっている。さらに、どちらの調査においても、現場に入って丁寧にデータ取得をおこなっている点、文脈の特性を活かしながら分析して結果を導出している点が、非常に有用な研究になっていると考えられる。

本論文の総合的評価であるが、ドイツにおける移民の「統合」についての多層的な考え方を記述できた点で高く評価できる。さらに、本論文が調査対象とした4人の移民女性たちの語りは、一つ一つの要素を丁寧に拾い解釈が試みられている。この部分は力作ということができ、本論文の特長となり、特に強く印象に残り学術的貢献度も高い。また、論文がめざすところのトランスナショナルな視点や帰属意識の形成などについて、移民の母親のライフヒストリーの聞き取り調査を行うことにより考察を進めた点で、先行研究とは一線を画した、移民の母親たちが経験した移民のプロセスとドイツ政府の「文化的仲介者」としての役割を鮮やかに描き出している点も高く評価できる。ドイツの移民政策に関連して、その背景となる国内外の事件や事象についての記述や、ライフヒストリーにおいての注釈の必要性など、論文の読者が理解を深めるための補助線となるような工夫等が求められるが、なによりも膨大なライフヒストリーの部分は強い説得力を持っている点を審査委員会は大きく評価している。

以上、審査委員会は博士の学位を授与するに十分に足る論文であるという意見で一致した。